
七 夕

矢羽はるや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七夕

【Nコード】

N8863U

【作者名】

矢羽はるや

【あらすじ】

7月7日七夕の夜、時は深夜に近い。笹と短冊と天の川に飾られた世界で、男女二人が織り成すラブストーリー。
「ねえ、七夕って何の日なのかな？」

「ねえ、七夕って何の日なのかな？」

「なにを言っているの？七夕は織姫きょうと彦星が一年に唯一会える日なのよ」

「分かってるよ。でも、それって願い事するのに関係ないよね」

「そうね。それがどうかしたのかしら？」

「うん、願い事されるのが嫌なんだ……」

「どうして？」

「自分の願いも叶えられないのに、他人の願い事なんて叶えられるわけないんだよ」

僕と彼女は、お互いにもたれかかる様に背中合わせ。

夜空にはきれいな天の川が流れ、僕たちの周りでは、皆の願いのこめられた短冊が風になびく。

織姫の背中、暖かいな。

このままずっと、一緒にいれたらいいのに……。

そんな願いも叶えられない。

「そうかも知れないわ。でも、私のお願い事は叶えられるでしょ？この一年間、ずっとあなたに会いたいと願ってたら、会いに来てくれただから」

背中合わせに座っているから、顔を見られることはないけど、自分でも顔が赤くなってるのがわかる。

「それに、他人の願いなんて、私でも叶えられないわよ。嫌になったりもするわ。けど、あなたの願い事なら、いくらでも聞いてあげる。私が叶えてあげられる願いなら、叶えてあげてもいいわ。あなたは私に何をしてほしい？」

自分の胸に手を当てる。

願い事が……

僕たちはまだ、キスしたことがなかった。

情けない話だけど、僕は好きだと言ったこともない。

なかなか切り出せない僕に、織姫は今みたいなチャンスをくれるけど、僕にはその誘いに乗る勇氣はなかった。一緒にいけないことに、耐えられなくなってしまうそうで……

寂しい思いさせちゃってるのかな。

「なんでそんなに楽しそうなの？」

「——彦星は今日一日楽しくなかった？」

また誤魔化そうとしてるって、思われたかもしれない。

「楽しかったよ……」

「私も楽しかったわよ」

織姫が立ち上がったのか、背中に感じていた温もりが離れていく。思わず振り返りそうになったけど、背中にそっと抱きついてきて、振り返れなかった。

恥ずかしいから、僕は楽しかった悲しい話を続ける。

「で、でも……」

「でも？」

「もうすぐ、離れ離れになっちゃう——また一年間、君に会えない日が続くんだって思ったら……」

離れ離れ。今日一日、ずっと心に思っていたこと。だけど、言葉にすると今までにより増して胸が締め付けられた。

「私だって辛くないわけじゃないわ。でも、一年後にまた会ってくれるんでしょ？それが分かっているから、毎晩あと何日であなたに会えるんだろうって、一日一日を指折り数えて、その日を楽しみにまってるのよ」

「僕だって数えてるけど、指折り数えてたりしたら物凄く時間がかかったよ」

「あら、知らないの？指折り数えていくほうが、あなたに会える日が近づいてきているのが実感できて楽しいのよ」

嬉しいけど、少し馬鹿らしい。

織姫と話しているときは胸がはずむ。一緒に話していると、言葉の

節々に僕を好きでいてくれることを感じれる。

「ありがとう、ちよつとだけ楽になったよ」

ちよつとだけ、本当にちよつとだけだけど、楽になった。

織姫が立ち上がる。

「そろそろ、時間ね」

少し哀愁のこもった言葉。

僕もつられて腰を上げて、織姫と向き合う。

「何をそんな顔をしているの？私を悲しくさせたいのかしら？」

「そうだね。ごめん」

僕は作った偽りの笑顔を浮かべた。

織姫は優しい。僕ができるだけ辛くないようにと、気を使ってくれている。出来るだけ僕が笑顔でいられるように。

けど、こんな悲しげで寂しげな笑顔を見せる彼女と、このまま別れてしまつていいのだろうか？

「さよなら。一年後には絶対会えるわ。またね」

一年後には絶対会える。それは、僕への言葉なの？それとも……

僕が伝えなくちゃ。織姫は少し強がりなところがあるから、たぶん自分からは言わない。

織姫はずっと待つてゐるんだと思う。今伝えなくつたつて、ずっと待つてくれる——今までみたいにずっと……。

「ちよ、ちよつと待つて」

でも、僕は織姫を帰さない。この思いを伝えるまでは絶対に。

呼び止めると、織姫がほんの少しだけ嬉しそうな顔をした。

「僕の願い事なら、いくらでも聞いてくれるつて言つたよね——
聞いてくれる？」

僕の懐には僕の願いのこもった短冊が二枚ある。これを渡そう。

「いいわ。聞いてあげる」

嬉しいのか悲しいのか分からない表情で、織姫は言った。

短冊を一枚だけ取り出して、織姫に渡す。

織姫は一瞬だけ不機嫌そうな顔をしたけど、すぐにいたずらな顔

で笑った。

「何よ。これじゃ、私が叶えてあげられないじゃない」

僕が書いた短冊、そこには『マイホームが欲しい』と書いてある。
「それに家なら持つているでしょ？」

「ち、違っただよ。そうじゃなくて……」
伝えたい。

勇気と言葉を絞り出して、君に伝える。

「君と……一緒に、す、住めたらいいなって…思っ…」

「ふふ、私もよ」

首をかしげて見せる、優しい微笑み。

でも、本当に伝えたいことはこんな程度のものじゃないはずだ。
伝えたいことはもっと先。

ちゃんと聞かせてあげたい——僕の思いを。

ゴクリ、緊張する。

「……………たい」

「え？」

「君と結婚したい。君と家族になりたい。君と一緒に笑って暮らしていきたい」

言う、言える。伝える！

「——僕は、君のことが好きです」

ちゃんと言えてなかったかもしれない。舌が回ってなかったようにも思う。

でも、好きって言えた。

これは確かな事実。

人間が短冊に願い事を書く理由が分かった気がする。短冊は自分でその願いを叶える為のきっかけなんだ。自分の願いを短冊に書いて、自分でそれを目指すんだ。そういうものじゃないかなと、僕は思う。

僕は願いをかなえられただろうか。

この思いは織姫にしっかり伝わったのかな？

さっきまで驚いたような顔をしていた織姫は、今は泣いていた。
「全然言えてないわよ。声が小さいわ。それに、噛んでばかりね。文脈もめちゃくちゃだったわ。そんなのじゃ全然聞こえないわよ。だから……もう一回言って」

涙を流しながら、照れ隠しにしか見えない文句を言って、最後には、こんな頼りない僕に笑って甘えてくれた。

そんな君が好きだ。

けど、ちよつと意地悪。好きは聞こえてたくせに。

そんな僕の大好きな織姫は、二人で過ごした今日の日の中で、一番の笑顔だった。

いつか僕にもう少し覚悟ができれば、このもう一つの短冊も見せよう。今はまだ、恥ずかしくてそんな勇氣はないけれど、きつといつか……。

もう一度、この笑顔が見たい。

「織姫、好きだよ」

この笑顔を見るためなら、今日以外の日が、恋しくて恋しくて、耐えられないほど辛くなったとしてもいいと思える。

「私も好きよ。彦星」

織姫はそう言うなり、僕の胸に飛び込んできた。

涙を見られたくないのか、胸に埋めた顔は見せてくれない。

「嬉しい。あなたがこんなこと言ってくれるなんて思ってたから……。私、ずっと不安だったのよ。一年に一度しか会えない私を、好きでいてくれるのになって」

織姫の服を掴む力が少し強くなって、言葉を続ける。

「あなたの気持ちは分かってたけど、いつまで経っても好きって言ってくれないから、本気で私のこと好きなのか分からなくなったこともあったわ。あなたが私に向けてくるのは、子供の恋と同じようなものなんじゃないかって、私の想いはすれ違ってばかりじゃないかって、ずっとずっと、怖かったのよ」

「い、ごめん」

織姫は僕の胸襟で涙をふき、まだほほに涙の跡が残ってる顔で意地悪そうに笑った。

「ふふ、いいわ。その代り、こんどはあなたが私の願いを聞いてくれるかしら？」

「うん。いいよ。その願いは今は無理かもしれないけど、いつかきつと僕が叶えてあげるから、僕に聞かせて」

「ありがと」

そう言つて、近くにあった水色とピンクの寄り添った短冊の、ピンク色のほうを手にとった。すると、笹に結んであったはずの紐が、魔法のように解ける。その短冊に織姫がそつと息をかけると、『彼氏とずっと一緒にいたい』という字が紙から抜け出して、もう片方の水色の短冊の中に入ると、文字同士が寄り添うように並んだ。

それを見て織姫は微笑した。そして目をつむりながら、文字がなくなつた短冊をなぞる。

「これが私の短冊よ」

僕は差し出された短冊を受けとり、それに目を落とす。

あれ？

てつきり指でなぞつたときに、文字を浮かび上がらせたのかと思つただけだ…。

「これ、何も書いてn……」

僕が顔をあげた瞬間、何か柔らかいものが唇に当たった。

一瞬、何か分からなかつたはずなのに、もう顔は真っ赤になつてゐる。倒れてしまいそうだ。

しばらくして、いつの間にか織姫の顔は離れていたけど、僕は何も口をきけなかつた。

「ふふ、何をそんなにびっくりしているの？私のこと好きなんですよ？知らなかつたのかしら、私はそれ以上にあなたのことが好きなのよ」

少しほほを赤くして、僕の渡した短冊をしっかりと手に握つて言つた。

「彦星、愛してるわ」

今日がもうすぐ終わりを告げる。

言いたいことは言い終わったのか、織姫は笹とたくさんの短冊に囲まれた中で、幸せを撒き散らしながら光となって飛んでいった。

「僕もだよ」

届くか分からないけど、天に向かってつぶやいてみる。

この短冊、意味なくなっちゃたな。

僕はもう渡さないであろうもう一枚の短冊を、近くにあった笹に結んだ。

「僕も、もう帰らないと」

また、僕の好きな人のいない、長い長い364日が始まる。

「来年、また会いにくるよ。織姫」

（後書き）

あとがきです。はじめまして、初投稿です。本当は連載の序話を初投稿するつもりでしたが、時期的にこれにしようと思めました。七日に投稿すればよかったのですが、このネタに決めたのがすでに9日でしたので、一週間以上遅れてしまいました。近々、連載を開始する予定なので、そちらも目を通していただければ幸いです。ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8863u/>

七 夕

2011年7月24日03時18分発行